

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2480 号

Does endoscopic retrograde cholangiopancreatography carry higher risk for patients 90 years and older? A single institution retrospective study

90 歳以上の患者（超高齢者）への ERCP（内視鏡的逆行性胆管膵管造影）は高いリスクとなりうるか？単一施設の後方視的検討

荻原 伸悟（おぎわら しんご）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、90 歳以上の超高齢者に対して内視鏡的逆行性膵胆管造影（Endoscopic Retrograde Cholangiopancreatography : ERCP）を用いた症例の特徴を 70 歳代と比較検討することにより、ERCP の適応は対象患者が単に超高齢者であることで決定されるべきではないことを初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。

近年、急速な高齢化と内視鏡技術の進歩により、高齢者に対し、ERCP を行う機会が増加している。胆道疾患に併発した胆道感染症は投薬のみでの治療は困難なことが多く、治療の一環として ERCP を行う必要となる。しかし、一般的に高齢者は各臓器の予備能が低く、侵襲のある検査および治療による偶発症で致命的になりうる。そのため、特に 90 歳以上の超高齢者では基礎疾患や全身状態などで ERCP を躊躇することがある。超高齢者に対する ERCP の安全性は、内視鏡医にとって主要な関心事である。本論文は後方視的に 70 代のグループと 90 歳以上のグループを比較することにより超高齢者の ERCP 安全性を検討している。PS や ASA、併存疾患の有無などの患者背景は、超高齢者において有意に悪く、ERCP を躊躇しうる群間差が認められた。ERCP 後の経過においては、超高齢者のグループで 2 例の消化管穿孔を認めたものの、致命的にはなっておらず、有害事象、死亡率において群間差は認めず、超高齢者であっても ERCP は必ずしも高いリスクを伴うとは限らないと結論づけている。

ERCP の際には、最大限の注意を払えば超高齢者であっても ERCP は必ずしも高いリスクも伴うとは限らないことが結果として示されており、ERCP の適応は対象患者が単に超高齢者であることで決定されるべきではないことを臨床的に明らかにした。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。